

---

## 文化セッションの概要

コーディネーター 張 琢

1978年末の中国共産党第十一期三中全会において改革開放路線が決定してから、2003年11月のこの愛知大学国際シンポジウムまで、ちょうど25年の歳月が流れた。この四半世紀の間、中国は経済体制の改革を模索し、一步一步段階的に大きな改革を行ってきた。その結果、中国経済の急速な発展は、この時期最も世界が注目する経済現象となった。経済体制改革が誘発する社会構造、生活様式および思想・観念の変化は、相前後し、公然とあるいは隠然と現在の政治活動と政治思想に具体的に現れた。例をあげると、20世紀の70年代末から80年代初めには、改革全般を先導する思想解放運動が興り、80年代半ばには経済体制改革の前進に伴い政治体制改革に関する大論争が展開されたが、1989年の六・四事件後には政治改革にショックが走った。しかし1992年の鄧小平の南巡講話後、中国経済の急激な成長および中国経済と国際経済の交差に促されて、新段階の啓蒙思想が次第に醸成され、政治改革の新たな道のりが見え始めている。

中国の近代以降の社会変革において、鋭敏な意識を持つ知識分子のエリートは常に前衛的な役割を担ってきた。現在の中国政治改革において、中国共産党内の民主派と学術界の中国の発展の道のりを模索することに執念を持つ知識分子たちは、またもや自己の歴史への責任感によって新啓蒙の役割を務めた。同時に、現在の中国社会の複雑性を反映して、彼らの思想・観念と主張に多面的な特徴が現れることとなった。それゆえ、本国際シンポジウムの文化セッションは「新啓蒙論と新自由主義および新左翼——「中国近代論」と「ポスト・モダン」の評価をめぐるアポリア」をテーマとして選定した。また上海師範大学教授の蕭功秦先生、中国社会科学院近代史研究所研究員の劉志琴先生、台湾大学教授の葉啓政先生、ハワイ大学準教授のケイト・シャオ・チョウ先生、神田外語大学助教授の興梶一郎先生、神戸大学助教授の緒形康先生と愛知大学教授の周星先生を本セッションの参加者としてお招きし、愛知大学教授の張琢が司会を担当した。

本セッションではまず上海師範大学の蕭功秦教授が「現代中国のインテリ層における思想の分裂およびその政治的影響」というタイトルで基調報告を行った。蕭教授は改革開放以来の中国大陸における知識分子内に起きた自由派と新権威主義の間の論争を振り返り、1990年代以降の自由派と新左派の思想分裂、新左派の主な理論的リソース、理論的根拠および穏健派と急進派の二大類型を分析し、さらに知識分子の思想分裂が将来の中国政治に対して与える影響について若干の推測を行った。

蕭功秦教授は次のように述べている。1980年代中期以降、中国のインテリ層の中に自由派と新権威主義の論争が現れたが、この論争は、実際のところ20世紀初頭の自由民主派と

開明専制派による論争の歴史的な延長線上にあった。自由派は個人の自由権利と民主化を強調し、他方、新権威主義者は秩序と権威を強調した。しかしながら共に中国の民主化が最終目標であるという点では基本的に一致している。1990年代中期、ソ連東欧における急進的な民主化が挫折したこと、市場化の過程でインテリ層が相対的に利益を獲得したこと、イギリス・アメリカの政治哲学が知識分子の中で次第に重視されていったこと、などにより、中国における自由派インテリ層の中心は穏健派となっていき、中国の学術界は急進的な自由理念を批判的に考え直すに至った。自由派インテリ層の中道派（穏健化した自由派インテリ層）と新保守主義（新権威主義）は次第に合併し、民間における社会思想の主要な趨勢となった。市場経済が中国に浸透していく中で、経済の急速な発展と共に、社会における貧富の分化、東部西部地域間の格差、権力と貨幣の取引、腐敗や社会の不平等問題は、中国社会において次第に顕著になり始めた。このような状況下において、インテリ層の中に三種類の異なる思想的価値をもつ趨勢が現れた。第一に、知識分子中の新右派は、改革中におこった上述の各種のマイナス現象は現代化の過程において払うべき不可避の代価であり、経済の発展だけが、過渡期に現れる各種社会問題を解決することができ、経済発展の過程では政治的安定こそがすべてに優先されねばならない、と考えている。これらを主張する人の中には新権威主義者および自由主義右派がいる。第二は自由主義中道派であり、民主化を進める政治改革は、多元化した社会の権力に対する監視を強化し、民主によって腐敗と二極化は抑制され、独占的な権力の地位を改善し、そうしてようやく基本的な解決の道が開ける、と考えている。第三の観点は新左派であり、すべての経済発展において現れる不公平を資本主義の私有制に伴う不可避の現象であると見なし、中国は現在すでに事実上「資本主義社会」に突入しており、改めて平等主義に帰ることが「公平な社会」問題を解決すると主張する。彼らは毛沢東が晩年行った文化大革命の価値に「改めて気付いた」としている。新左派の思潮は西洋における左派の社会主義思想理論を基礎とし、平等と公平を中核の価値に据え、中国の市場経済への転換期における社会層の分化、社会モラルの喪失と社会問題は資本主義社会の矛盾の体现であり、また平等主義を中国のかかえる問題を解決する主要な選択肢であると考えている。

また、蕭功秦教授は新左派を「穏健派」と「急進派」の二種類に分け比較的精緻な分析を行った。そして、目下中国の知識分子における思想の論争に対し三点の展望をあげた。第一に、民主化を条件とする思想の多元化である。第二に、政治的な展望についてである。急進的な新左派と現代化の過程で見捨てられて絶望した下層の階層とが結びつき、「邪悪な富裕層」に反対する運動が起こり、中国の土地に理想的な搾取のない公平な社会を新たに建設しようと努める。第三の展望として、民粹主義（大衆迎合）民主制と権威主義の両極からの揺さぶりによって、ラテンアメリカも陥った政治の畏にはまることが考えられる。最後に蕭功秦教授は、中国は矛盾に満ちてはいるが、経済発展の情勢は基本的に良好であり、現代化に亀裂が生じる可能性は決して大きくなく、もし発生したとしても上述の第二、第三の二種の展望が現実化する確率は決して高くはないとした。それゆえ自分のこの分析

は主に理論上の警世的意義を持つものであると強調した。

続いて、中国社会科学院近代史研究所研究員の劉志琴先生は「老革命家の新たなる覚醒——『炎黄春秋』の批評と分析——」というタイトルで、『炎黄春秋』雑誌を活動拠点とする中国共産党内の老革命家や理論家内の民主派の思想と政治活動を紹介し、参加者の大きな関心をひいた。劉先生は次のように解説している。当該雑誌は一部の引退した党、政治、軍部の指導層によって発起されまた支持されている刊行物である。「現実を重んじ、事実を記す」ことを旨とし、真実を語ることによって大衆の信望を受けている。作者の中には長期にわたって中央あるいは地方の指導者を務めた者も少なくなく、中国の重大な政治的事件の当事者や証人である。彼らは青少年期から共産党に付き従い、長期にわたって党の利益を重視することが習慣となっており、また程度の差はあるものの専制主義の影響を受け、党の従順な道具となってきたため、個人の自主的意識が薄かった。しかし文革の災禍と共産党の度重なる過ちは、彼らの思想的信仰に動揺や迷いを与え、ついには自我の新たなる回復を経験させた。そして、今再び彼らは若かりしころ追い求めた一度は失った民主の旗を掲げ、体制内部から中国の民主化を推し進めることを求めて止まない。彼らは共産党の支持派であり転覆派ではなく、決して自由主義者ではない。しかし中国の自由主義が未だに確固たる足場が固められていないという状況下にあって、彼らは程度の差はあれ自由主義の代弁者となっている。

葉啓政先生は「文化、政治と経済が交錯する中での中国現代化」というタイトルで発言した。葉先生は次のように指摘する。世界文明史の流れからすると、19世紀の満州人王朝の清朝期中国と同様に、現在の中国が推進している「現代化」も、基本的には18世紀以来の西洋の啓蒙主義的な理性文明に対する反応であり、その反応は、かつて西洋世界で起こった種々の現象ばかりでなく、西洋世界が提起した問題意識も同時に担うことになった。当然のことながら、中国人の反応は「中国的」なものであり、その反応は既存の伝統的な文化様式に支えられて進んでいるともいえる。常套句で形容するならば、「西餐中吃」（西洋料理を中国風に食べる）のような状態で、西洋の近代化が資産階級の「平等と自由」というスローガンにかこつけて既存の主導政治勢力から「公平と正義」を勝ち取ったことに比べ、現段階における中国の近代化は基本的にやはり政治と経済勢力が強く結びついたものであり、より適切な言い方をすれば、政治が経済に浸透し、後者を既存の運営の道理に取り入れたのである。しかしながら、資本主義の歴史的な性格が内包する自由主義的な思想は、将来の中国社会を政治民主化の問題に直面させるよう促すに違いなく、そしてこれもまた公平な正義を貫くのに考慮すべき基礎となる。近代化の過程において、中国人が直面する問題は、少なくとも初期の転換、中期の基礎確立、成熟の変化等の三段階に分け論じられなければならない。自由主義が「理想反映型」を主張しても、あるいは左翼思想が「現実修正型」に応える主張であっても、それらが言及するものは基本的にすべて「初期の転換」段階の問題、あるいはせいぜい中期の基礎確立段階に手を伸ばしているにすぎない。このため、(新)自由主義もしくは(新)左翼思想であろうと、それらの本質はす

べて知識分子が西洋の啓蒙主義的な理性的精神を引き継いでいるものであり、中国の特殊な国情に合わせて、中国の発展の方向性を確立するために出した段階的な「理想」の主張である。

ケイト・シャオ・チョウ先生は「国家との妥協——新自由主義者と新左翼——」をタイトルとした発言を行い、中国の知識分子が中国社会の移行期に直面しているディレンマについて分析した。一方では、左翼と右翼とも歴史的に国家の奴隷あるいは批判者であった中国の知識分子と自身とを積極的に区別し、できる限りこれと距離をおこうと努めている。しかし他方では、双方共にとりわけ左翼は国家の批判者として行動せざるをえないでいる。チョウ先生曰く、西洋の古典的自由主義者はかつて一世代にわたって中国の知識分子が受ける教育に影響を及ぼし、再編してきたが、すでに旧左翼への復帰を困難としている。現在までについていえば、中国の自由主義者はすでに多くの偉大な業績を手に入れており、私有財産制と市場経済の推進に少なからず貢献している。しかしながら、彼らは新左派だけが環境、大きな所得格差、官僚の腐敗、雇用保障等の民衆がおしなべて興味を持っている問題に関心があることを決して認めない。彼らは、躊躇なく市場経済を推進することで、市場がいったんそのメカニズムを発揮すれば、副次的な負の影響は消滅すると見込んでいると言いつつ。また、新左派の人々は政府の政策の批判者となっているため、同様に偉大な成績を勝ち取っており、彼らは貧困者や政府の政策の恩恵にあずかれない人たちの利益を守る代表的なスポークスマンとなっている。新左派の人々はみな西洋、特にアメリカの新左翼の影響を受けており、中国における自由主義の最大の脅威となる、あるいは完全に市場経済の自由の基礎を弱体化させるかもしれないということをチョウ先生は危惧している。

興梶一郎先生の発表タイトルは「中国の現実に向き合うか——「自由主義者・新左派論争」の背後——」であり、主に自由主義者と新左派の論争の社会背景について分析を行った。興梶先生は、自由主義者と新左派の論争は単なる学術論争ではなく、その背景には激変する中国社会の複雑な現実が横たわっていると考えている。自由主義者は共産党一党独裁体制が多くの社会問題を生み出す根源だと見なし、憲政政治の樹立、言論や結社の自由、多党制政治の実現、私的所有権の保障を訴え、一方、新左派は資本主義そのものに懐疑的であり、むしろ毛沢東時代を懐かしむ傾向がある。両者の共通点は、腐敗や貧富の格差など、社会的不公正に対する憤りであるが、その点については全く異なる考えを有している。自由主義者は、一党独裁体制に原因を求め、新左派は市場経済化に原因を求める。政治体制の改革においては、自由主義者が憲政政治の実現という明確な目標を提示しているのに対し、新左派は資本主義を批判する以外、明確な改革の目標がない。最後に、興梶先生は、目下、中国経済の安定的発展を阻害しているのは「政治」であり、「経済は自由、政治は専制」という矛盾を解決しない限り、中国経済の持続的発展は難しいであろうと指摘した。

緒形康先生は「現代中国における「公正」と「正義」というタイトルで、時の経過に

基づき中国の自由主義と新左派の論争の糸口を探し、この論争を1994年以後、1997年以後、1999年以後に分類し、細部にまでわたる緻密な分析を行い、中国からの基調報告者である蕭功秦先生を非常に感心させた。

最後の発言者である周星先生は「「華化」・グローバル化と文化の自発的な動き——今日における中国少数民族文化の現状と動向——」というタイトルで、「現代化」と「グローバル化」の過程における中国少数民族の文化的境遇および動向について分析を行った。周先生は次のように指摘した。国内外の「現代化」と「グローバル化」という文化の衝突の下、中国少数民族の文化もさまざまな動向を示している。これらの動向を分析することによって、中国社会や中国文化の複雑性を深く理解するのに、大いに助けとなる。目下、中国の「現代化」の進展は、依然として現代の「多民族国家」における国民意識をいかに確立し高めるかという基本的な問題に直面している。少数民族を含む民族の帰属意識と国家の帰属意識、さらに少数民族を含む中国文化の自主性と文化自覚は中国にとってこれから長い間避けて通れない重要な課題である。

本セッションの主要テーマは、本来一般民衆が手をつけず、知識分子の一部が関心を持つ話題であるため、主催者は当初聴衆を引きつけられるかどうか非常に心配していた。しかしながら、発言内容の斬新さ、明瞭さ、独自さおよび質の高い聴衆によって、二時間半という長時間のセッションにもかかわらず、200数名の参加者は終始一心に聞き入り、また先を争って質問がなされ、本セッションは成功裏に終了した。

(原文は中国語。邦訳 磯部美里)